

深津文雄先生のことなど

対談 深津大慈／大村恵美子

東京バッハ合唱団との関わり

大村 昨 2000 年 8 月 17 日、深津文雄先生が 90 歳のご生涯を閉じられました。合唱団月報にとりあげて、皆様にお伝えしたいと思ったのですが、現在、合唱団とのつながりは、むしろ御子息の大慈さんのほうに移っていて、文雄先生のことを書くとすれば、大慈さんとのことにも触れないわけにはゆかないと思えたのです。

いちばんありがたいのは、大慈さんの筆で父・文雄先生のことを書いていただければ、一石二鳥と考え、お願いもしていたのですが、超ご多忙の大慈さんのこと、それにとっても簡単にとり組めるような対象ではないことが、よくわかります。

そこで、箱根に一泊取材旅行という形で、とりあえずの記事にさせていただこうと思いつきました。思いつくまま話していただくというわけです。

1972 年に私が『バッハ合唱団の十年』を出版したときに、「まえがき」を文雄先生にお願いし、また 1992 年に『東京バッハ合唱団一三十年の歴史』を出したときには、「最初のクリスマス」「バッハ・ゼミナール」「〈バッハ合唱団の十年〉出版」等、いくつもの個所で、文雄先生のことを紹介しています。

『三十年の歴史』の中から引用してみます。

いま、『バッハ合唱団の十年』を読みかえしてみると、この本全体を貫いて、はからずも一本の見え隠れする太い縦糸が通っていることに気づきます。それは、その頃私が心の深いところで影響を受け、実際に活発な交流のあった、深津文雄先生と、先生のおつくりになった婦人のための保護施設「かいた婦人の村」の存在です。私はこの本を書き終える頃、「まえがき」を書いていただくのに第一に頭に浮んだのが深津先生でした。お願いすると、深津先生もまたころよくお引き受けくださり、ユニークな「まえがき」を書いてくださったのでした。

それを読むと、深津文雄先生という方が、いかに一くせも二くせもあるただならぬ人物かということが、よく出ています。先生も 1970 年に『いと小さく

ましたので、ここであらためて御紹介することもないのですが、この方がまた大のバッハ好きで、『礼拝と音楽』の編集の仕事を通じて知己を得て以来、私はバッハ合唱団の骨組づくりにどんどん先生のお力をお借りするようになりました。

『バッハ合唱団の十年』の中から、深津先生に関連する内容をひろってみると、合唱団発足の 1962 年 12 月 16 日、「かいた婦人の村」の前身「いずみ寮」を訪問したことが、まず出てきます。

それから、月 1 回定期的に「バッハ・ゼミナール」を続けてゆく企画に、はじめから深津先生のお力を仰いだことが、1 章を設けて報告されています。蓋あけまでの期待にみちた準備、そして先生の御病気による、第 2 回早々からの無残な進路変更。

館山市に「かいた婦人の村」ができてからは、合唱団も数回泊りがけで訪問し、小演奏会・交歓会などをしました。私自身も大学のいろいろなグループを連れて訪問し、研究費の予算の中からも比較的自由にそれを支えることができました。

1970 年には、先生の御子息がその頃団員となってバッハ合唱団の中で歌っていたのですが、その大慈さんの発案で、合唱団の定期演奏会を慈善演奏会と兼ね合わせ、杉並公会堂・渋谷公会堂と 2 回とも大きなホールに移して、収益をうみ出し、「かいた婦人の村」の一面に、作業棟を建てたのでした。

この頃から、深津二世と私との交流もまた繁くなり、「かいた婦人の村」の歴史にも栄光とドラマの内容が加わって、それはそれで一冊の部厚い本が書けるほどなのですが、実際には、私がその後大学を辞職したのを最後に、館山訪問の機会が途絶えてしまいました。私の手をはなれても、明星大学の学生たちの館山合宿と婦人の村訪問とは、この大学の音楽クラブの伝統となって、相変らず現在も続いているとききます。

《深津文雄プロフィール》

- 1909 年 敦賀で牧師の子に生まれる。
- 1933 年 日本神学校卒業。
- 1935 年 茂呂塾創立。
- 1937 年 上富坂教会再興。
- 1954 年 ベテスタ奉仕女母の家創立。
- 1958 年 いずみ寮創立。
- 1965 年 かいた婦人の村創立。

(自著のプロフィールより)

2000 年 8 月 17 日、永眠

私が文雄先生にお目にかかった最後は、1995年、長い休止のあと、大慈さんからお知らせがあり、「カードテリア」というグリーティングカード専門店を開店することになったので、そのオープニングにぜひ、というご招待をいただき、自由が丘のお店に伺ったときです。館山にお住まいの文雄先生ご夫妻が、とても晴れやかな顔でお見えになり、多くの方々と楽しげにご歓談になりました。その後も何回か出版物、テレビなどで接する機会があり、とくに98年4月の早朝、テレビ(再放送、NHK教育テレビ「心の時代」)で偶然にもゆっくりと先生の現状をうかがうことできたのは、しあわせでした。

昨年11月23日に、思い出の板橋、茂呂塾保育園で先生の「追悼のつどい」があり、その折に数々のプレゼントが、参列者に配られました。カットに使わせていただこうとしている「おきよと声あり」も、その日に歌われ、プログラムに印刷されていたものです。また、御著『聖書の真髄』もいただき、あらためて読み返しても、1953年にラジオで語られた内容が、今日の日本にそっくりそのまま力をもって迫ってくるのを感じます。

…悪とは何か? ……それは、人格を傷つけるからだだと思います。人間が、人間として生きている、その全体—それを正しくみとめあってゆく—ということ、から外れるからです。

…神を信じ、人格を尊重しようとしないうちに、それから外れる危険—ほんとうの罪—は問題とならないのかもしれませんが、そのことが、ヒッキョウするに、今日の日本—神のいない、人格の喪失された日本—をもたらしたのであります。その悲惨さは、毎日みなさんの御覧のとおりであります。

なにしろ、私の芸大生時代から昨2000年にわたる、半世紀にも及ぶ年月のことですから、私あるいは合唱団との関わりを気にしながらでは、とてもむずかしいでしょうから、大慈さん、そういうことはいっさい措いて、まずお父様のことから、ご自由に話し始めていただけませんか。

息子から見た父・深津文雄

深津 ぼくの子供のころ(1947年生まれ、姉二人の長男)、父がよく家にいるでしょう。ひとからお父さんの会社は、と聞かれて「アバコ」と答えていたようです。先ほどのラジオもそうですが、アバコ(AVACO、キリスト教視聴覚センター)によく出かけていたものですから。

学生時代から、父はバッハに打ち込んでいて、アバコにレコードを集めてもらい、また当時で50万円というすばらしいLPの再生装置を寄付してくれた方があったり、海外からもレコードが届いたりして、週1回アバコのスタジオで、バッハの音楽の放送を受けもっていました。上富坂教会で人を集めて、バッハの無伴奏チェロソナタをかけたときなどは、みんな涙を流して感動したそうです。

信仰の面では、深津文雄という人間は、一生イエスに深くとらわれた人で、人間洞察にすごいものを

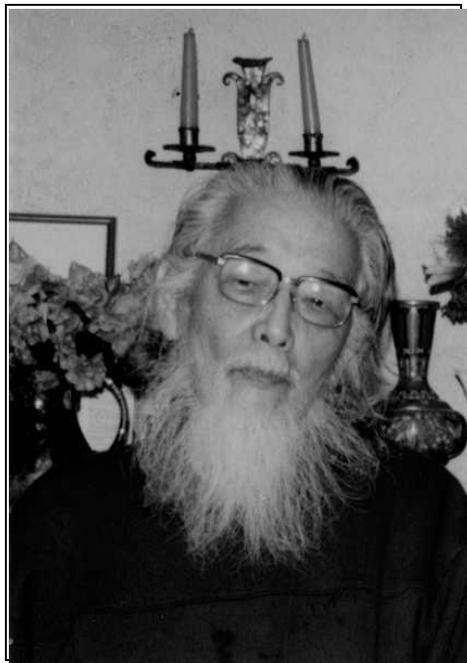
もっていたと思います。人一倍、神との対話というか、自分に自分を問う時をたつぷりと生きていたようです。

大村 あなたがお父様をよく理解なさり、それを伝えようという姿勢でいらっしゃることは、とてもすばらしいと思うのです。息子の立場から、父親の生き方を肯定されながら、ご自分はどのように生きることを考えられるのでしょうか。

深津 ある段階までは、父と一緒にやってゆこうとしていたのだと思います。ご存じのように、父はとても自己主張のはげしい人間で、価値観も自分のものを押しとおし、

身内の者へのNOが強く、周りのものはなかなか耐えきれない。

ぼくが学生時代、バッハ合唱団に参加していて、磯谷威先生の発声レッスンを数回受けました。磯谷先生は風貌も父と似ていて、最初から、これはわが師、と感じたのです。「深津君、目を閉じてごらんなさい、あなたのまわりに天使がたくさんいるでしょう、それと声を合わせるんですよ」なんて、ふつうなかなか言われなかったことを、はじめにおっしゃった。そして、あなたはイタリア式発声を学ばるとよい、チャーザレ・シェピを聞いてごらんと言われたけれど、そんなレコード探し方がない。すると、父はアメリカから取り寄せてくれました。わが家でそのレコードをかけると、ぼくの子どもが「あ、お父ちゃんが歌ってる」なんて言っていました。



大村 きっと、同じような声質なんでしょう。文雄先生も、イタリア人の血が流れているのでは、と思えるほど、深いつややかなお声でしたものね。だから、長い長いブランクの後、数年前にあなたがまた現れて、バッハ合唱団で、また歌いたいと言われたとき、とてもうれしかったのですけれど。

深津 今だって、すぐにでも行きたくてたまらないんですよ。でも、自分で始めた仕事だから、いくら時間をかけても間に合わないくらいで、現在は気ばかりはありながら、あらゆるものがお預けになっています。これではいけないと思ひながら、当分は…。

大村 文雄先生がこの合唱団の始めのころ、バッハゼミナールの打合せにいらしてくださったとき「ぼくの若いころには想像もつかなかったような、すばらしいことが、今はできるようになったんだなあ」とつくづく喜んでくださったのです。もう少し早く、先生ご自身も演奏に参加なされたらすばらしかったでしょうにね。

いつか、大慈さんの発案で、年2回、杉並公会堂と渋谷公会堂で、バッハ合唱団が「かにた婦人の村」のために定期演奏会をささげましたね（1970年）。大慈さんがひとりでがんばってくださり、作業棟の建設という、目に見える成果も残してくださったのですが、お父様はどう言っておられましたか？

深津 資金づくりは、それまで映画会とかいくつかしてましたけれど、内容には必然性がなく、バッハ合唱団がバッハを歌ってくれるのだから、いちばんふさわしい内容でうれしい、心の底からありがとうと言いました。

実際、かにた村の夏祭りなどでも、どうしても芸能大会みたいになって、それを父は、非文化的でつまらない、バッハのこれとこれをやるとよい、などと、高踏的な主張をくりかえしていました。

いちど澄んだ水を飲んだ人なら、二度と泥水を飲まなくなる、元にもどらないように、どんどんいいものを与えようよ、それが人間に対する信頼なんじゃないか、というのが、理想主義者の父の言い分なんです。彼がいなくなった今では、もうさっそく、

職員でも、これまではあまり硬かったから、もっとわかる音楽をやりましょうよ、という風潮になってきていると聞きます。

大村 かにたの中では本物を味わわせたい、ということだったのです。

深津 食べ物でもなんでもそうで、ここでできるものを売ってお金をかせいだりしないで、作るものはみんなで食べてしまおう、貨幣価値に置き換えるのはやめよう、ということでした。

死をへだてた交わり

大村 さて、お父様に去られて、現在はどのような心境でしょうか。

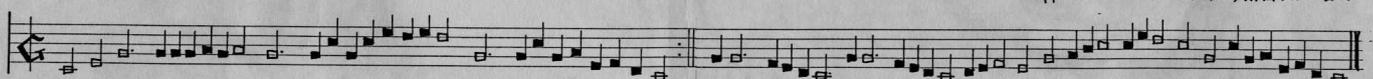
深津 これまでも、自分は離れて存在していましたがね。消えたからといって、特別な変化はないのですが、むしろおもしろいことに、以前よりも非常に親しくなって、今ここの場にいる、という、それほど近い存在になってしまっているのです。ぼくは彼にいろいろつらい思いをさせて来ているので、申し訳ないという気持ちも強いのですが、先ほども話したように身内（彼のつくった組織内）に対するNOの強さが激しい人だただけに、あまり好意的に評価がされていない面がある。それに対してぼくは、正当に評価して伝えたい、という気持ちなのです。

大村 生前とても親しかった、あるいは自分にとって価値のあった人物が世を去ったあと、これまでよりも純粹な形で交わりが始まる、という経験は、7歳で父と死別した私の、心の核に持ちつづけている気持ちで、よくわかるのです。とてもいい関係になる、そのようなお父様に恵まれて、あなたもおしあわせです。

直接つながらないかもしれませんが、私が、父子おふたりに接して、私との交流を振りかえってみるとき、これもずいぶん若いころに感銘を受けた、

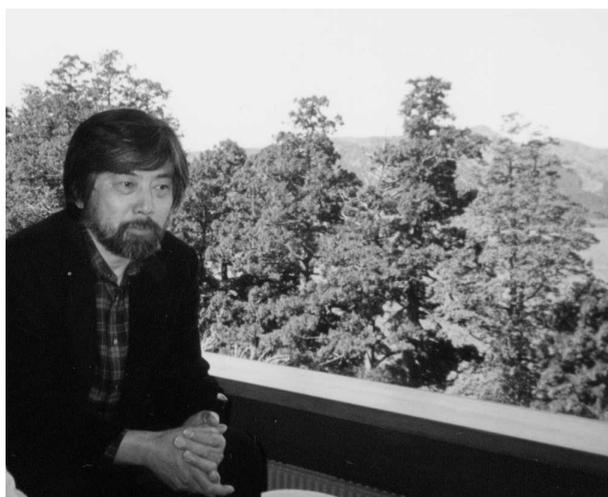
97 Wachet auf, ruft uns die Stimme

Philipp Nicolai 1599 作詞・作曲、深津文雄 訳。



- | | | | |
|---------------------------|-----------------------|--------------------------|--|
| 1. おきよとこえあーり
よわのときしらーす | ものみのたかみよ
そのこえもあざやか | り おきよエルサレム
か おとめらはいずこ | みこ きませり とも しびとり
ハレルヤ せなえしうたげに
いでゆきむかえよ |
| 2. よもりのさげびーに
まれびとあめよーり | みなこころはずみ
かがやきてくだれば | て いそぎたちいでぬ
ほしもいでむかう | かむ りのきみ かみ のみこぞ
ホシアナ はえある やかたに
ともないてすすまん |
| 3. みさかえたえーよ
じゅうにのしらたーま | みつかいのしたも
みかどべをかざれば | て こともてかねもて
みつかいもひと | いま だきかず いま だみざる
よろこびもろとも こえあげ
ハレルヤとさけぶ |

深津文雄訳詞による“Wachet auf, ruft uns die Stimme”。深津文雄追悼のつどい式次第より。バッハがカンタータ第140番くめざめよと呼ばわるものみの声高し>の基本コーラルとして用いたものと同じ。東京バッハ合唱団第89回定期演奏会(本年5月12日)の上演曲目に含まれる。



深津大慈氏

A.シュヴァイツァーの次のくだりを思い出すのです。これは、バッハのコンタータ第6番“とどまれ われらと”が描き出す、イエスと弟子たちが再会するエマオ途上の世界、そのもののように感じられます。

一般に、人間と人間との関係のなかには、私たちが通常みとめているよりも、はるかに多くの神秘がひそんでいるのではないだろうか？ なん年もまえから毎日いっしょにくらしている相手であっても、ほんとうにその人を自分が知っているとは、私たちの誰も主張するわけにはいかない。私たちはどんなに親密な人たちにも、自分の内的体験をつくりあげているものの断片しか伝えることができないのである。全体を示すというようなことはできないことだし、できたとして、相手がそれをとらえることはできないだろう。私たちは、たがいに相手の顔形をはっきり見わけることのできない薄暗がりのなかを、いっしょに歩いているのだ。ただ、ときおり、私たちが道づれとなにかを経験したり、たがいにことばをかわしたりすることによって、一瞬のあいだ、稲妻に照らし出されたように、私たちのそばにその道づれのいることがわかる。そうしてそのとき私たちは、相手の様子を看とる。が、それからまた、おそらく長いあいだ、暗がりのなかを、ならびあって歩いて行く。そして相手の顔形を思いうかべようとしても、それができない。

私たちがたがいに神秘であるというこの事実を、私たちはそのまま受け入れなければいけない。たがいに知りあうということは、たがいに相手のことをなにもかも知りつくすということではなく、たがいに愛と信頼とを抱きあい、たがいに信じあうことである。人は他人の本質のなかへはいりこもうとすべきではない。他人を分析するのは一精神錯乱者を正常にもどすためでないかぎり一高尚なしわざとはいえない。肉体的な恥ずかしさばかりでなく、精神的な恥ずかしさもあるのであって、私たちはこれを尊重しなければならぬ。魂も己れの殻を持っているのであって、これをはぎとるべきではない。私たち

はたがいに、君とぼくとはこれこれのあいだからだから、ぼくには君のあらゆる考えを知っておく権利がある、などと言ってはならない。母親でさえ、わが子に対してそういう態度をとることは許されない。そうした種類の要求は、すべてばかげており有害である。この場合必要なのは、みずから与え、それによって人の与える気持をめざますことである。君と行をとともにする人たちに、君の精神的本質を、できるだけ多くわかちあたえるがよい。そして、その人たちから返ってきたものを、貴重なるものとして受けとるがよい。

(A.シュヴァイツァー『生い立ちの記』白水社、内垣・杉山訳)

「カードテリア」の事業を起こして

大村 あなたが1995年に独立して「カードテリア」を始められた、そしてオープニングの日にご両親をお招きになったとき、先生もとても喜んでいらしたでしょう。

深津 そうですかね。よくわかりませんが。子どもの頃から、誕生日には、プレゼントはなくてもカードは必ずあげるもの、という習慣で育ったもので、そのつど適当なのがなかなかなくて、自分で作ったりもしました。ドイツのミッションなどの送ってくる写真のすばらしいカードがあって、まずそれがぼくの心をとらえました。中でもグローというメーカーのカードがとてもよく、自分でもそれをお手本にして作ってみた。何かをつくるというのが生きがいの人間なので、海外でたくさんのカードを買い集めて、今までなかった分野、日本でカード文化をひろめる仕事をしてみたいという気持ちが現実化してきたのです。

大村 ご自分の生活に根ざした発想で、すばらしいですね。ところで、これからの展望はどのようなものとお考えでしょうか。

深津 なるべくいいカードを仕入れて紹介しているわけですけど、もうすでに多くの人が始めている



ので、だんだんと難しくなってきました。あんがい外国にはカード専門店がないので、海外でもやってみたいという気もあります。

大村 日本ではどのような評価なのでしょう。

深津 この「カードテリア」に対する思い入れは、当のわれわれよりも、まわりのほうがつよくもっているほどです。われわれの生きる余地はまだ可能だと思っています。マネージメントにつよいスタッフが支えてくれば、と思います。

大村 最近はパソコンとかインターネットとかでもつくり出してしまう傾向にありますが、自分がえらんだ図柄のカードに、自筆でひとこと添えて出すというのも、機械だらけの生活と並行して、可能性があるかもしれませんね。

深津 そうですね、自分の思いをその時々カードの絵に託して届けられますからね。ぼく自身、自分の一方的な思い、大事な内容は、必ず書いて表現しますから。「カードテリア」の店にふみこんだたん、「あーっ」と歓声をあげるお客さんを、よく見かけます。今までになかった何かに出会ったという驚きなんですか。

大村 流れとしては、自分で文章を手書きするというのがどんどん減ってきているでしょう。その中で、カードのような選択肢がひらけているというのは、それだけ心の生活が豊かになることだと思いますね。

ことばによって心を伝えるという習慣は、これからはもっとあっていいと思うのです。人との交わりという、すぐお金や物をやりとりする、という習慣から脱してね。今では、いきなりデパートから宅配便でとどいて、前後になんのコメントもない、ということもあたりまえようになってきていますが、それでは真意はわからない。小さくてもカード一つ添えていけば人間らしいのにね。

深津 オープニングのときに、父が、この仕事のめざすものは、ひとに Best Wishes を伝えることだと言ったら、それを店名にしてお店を始めた人もいました。父はまた、このカードテリアの仕事は、自分のひらいているキリスト教文化の世界の一部であるといつて、喜んでいたようです。

大村 ここ数年は、バッハ合唱団の公演プログラムに広告をいただいたり、おりおりたくさんのカードをご寄付いただいたりして、とても感謝しています。

お暇をつくれるようになって、大慈さんもバッハをお歌いになれる日が一刻も早くおとずれますことを願っています。たいへん長い時間のお話を、ありがとうございました。(編集・構成 大村健二)

第18回くばっはめいと演奏会>予告

2001年7月22日(日)14:00-16:00、経堂ヤマハ・ミュージックホール(小田急線経堂駅前)と決まりました。

出演者募集

- ①独唱・重唱・独奏・アンサンブル
大枠はすでに決まっていますが、新しく参加を希望なさる方も受け付けます。
- ②バッハ<宗教歌曲集>コンテスト
大村恵美子訳詞『J.S.バッハ宗教歌曲集』の中から1曲または2曲、3節以上を歌う(節の選択は自由)。参加者の内、3名に上記楽譜を贈呈。

募集要項

- 資格 個人レッスン受講者・合唱団員・音楽学生・専門家のほか、当日の演奏曲を集中学習した方でもよい。
- 曲目 <宗教歌曲>を除いては自由。演奏時間10分以内を厳守。
- 参加費 <宗教歌曲>のみの場合 3,000円
その他の場合 10,000円
(<宗教歌曲>を併せて歌う場合も同じ)
- 手続き 事務局あて、氏名・住所・出演曲目・伴奏者名を、参加費を添えて提出。
- 申込締切り 6月30日
- 申込み先き <くばっはめいと演奏会>事務局
東京バッハ合唱団内

《ロ短調ミサ曲》を一緒に歌いませんか?

東京バッハ合唱団では、来年、創立40周年を記念して《ロ短調ミサ曲》を上演します。

バッハ音楽の総合であり、人類の芸術的遺産の最高峰とされるこの名曲を、あなたも一緒に歌ってみませんか?

バッハの大曲は概してそうですが(マタイ受難曲のように)、非常に歌いやすいのです。ただし丸1年をかけて練習をします。

この機会に、多くの皆様のご参加をお待ちしております。

◎練習開始:本年5月14日(月)より

第89回定演(5月12日)終了後の練習日から、本年12月の第90回定演の演奏曲目(クリスマス・オラトリオ第I部~III部、カンタータ第36番)の練習と並行して始まります。

◎詳しくは、合唱団事務局まで、案内書をご請求ください。

東京バッハ合唱団創立 39 周年記念会 ご案内

東京バッハ合唱団の創立記念会は、昨年にひきつづき、お2人の後援会員のお話を中心とした内容で行うことにいたしました。

昨年は、4人の後援会員の方々から、＜私のバッハ体験＞を語っていただき、食事をはさみながら、出席者全員とお話し合いをしていただきました。参加された方々も多く、活発な展開があつて、日ごろ機会をもてないでいる、後援会員と団員との交流も果たせて、大好評でした。

ただし、初めての試みで、改善の余地もあり、今年はこの点を考え直してみました。

○お話を3人以上の方にしていただくのは、時間的に忙しすぎる。

○会食を兼ねるのも、あわただしい感じとなり、

別に切り離したほうが落ち着くのではないか。

○これまで一貫して、記念会のご案内には、ご招待状と返信ハガキを同封して、団友・後援会員各位にお送りしていたが、もっと開かれた会にするため、月報のこの場をお借りして一般の方々にも呼びかけ、また経費節約のためにも、あらためてのご通知を省略させていただく。

【出席される方は、返信ハガキの代わりに、同封する郵便振替え用紙で、会費を予約振り込みしていただく】

以上の次第となりましたので、略式であるいは失礼かとは存じますが、ご理解たまわりますよう、お願い申し上げます。

東京バッハ合唱団創立 39 周年記念懇親会

- ◆日時 2001年7月2日(月) 18:30-20:30
 - ◆会場 目白聖公会 (JR山手線・目白駅下車5分)
 - ◆会費 1000円
- 【郵便振込みで予約、または直接申し込み】

シンポジウム＜心・くらし・歌＞

◆発題者

務台孝尚 (後援会員、曹洞宗・宗福寺住職)
丸山真人 (後援会員、東京大学教授・経済人類学)
司会 大村恵美子

務台氏は、1956年長野県の曹洞宗・宗福寺に生まれ、駒澤大学大学院などで道元禅師の思想を学ばれた後、現在はご実家の寺を継いでいらっしゃいます。バッハ合唱団でもかつてマタイ受難曲などを一緒にお歌いになりました。曹洞宗の梅花流詠讃歌を実践しておられます。

丸山氏は、1954年三重県松阪市生まれ。東京大学大学院時代から「広義の経済学」に関心を深め、留学後、明治学院専任講師などを経て現職。経済人類学やジェンダー論など最先端の分野で、海外のさまざまな研究を日本に紹介し、研究をつづけていらっしゃいます。

このお2人から、“心と口と行為と暮らし”(Herz und Mund und Tat und Leben BWV147)について、あらためて現代的な把握を伺うことができることと存じます。

◆参加者全員の方々に、1992年発行の『東京バッハ合唱団—三十年の歴史』(大村恵美子編著)を1冊ずつお持ち帰りいただきます。すでにお読みの方が多いと思いますが、PR用としてもご利用いただきたいのです。来年は創立40周年を迎え、新しい記念誌の編集が団員の手によって現在進められています。

◆発題者を囲んでの会食

同日シンポジウムに引きつづき、20:40、目白「揚子江」、会費：4,000円(予約とともに前納、締切り6月30日)

シンポジウムについては、予約なしのご来場にも応じられますが、会食の当日参加は、準備の都合上ご容赦いただきます。

◆ご参加申込みは、同封の専用郵便振替用紙にご記入の上、郵便局でお振込みいただくか、直接事務局へお申し込みください。